

自閉症スペクトラムの人々に対する療育とは如何なるものであるべきか

—河島メソッドからの示唆—

坂本美恵子・坂本幸平

(秋田県立大学) (国際医療福祉大学)

<要 旨>

本研究は自閉症スペクトラムの人々に対する療育とは如何なるものであるべきか検討するため、現在は陸上のパラアスリートとして活動するAの事例に注目し、トモニ療育センターの所長である河島淳子医師が、Aと母親に対して行った指導（河島メソッド）の具体的な内容とその療育方針について調査した。Aが中学生になった頃、母親は河島氏から療育方法を学び実践を重ねた結果、Aの問題行動は軽減し改善が見られた。本稿は、主に生後～中学校卒業までのAの様子について詳述し、河島氏の介入前後でAと母親に見られた変化に注目した。また、河島氏による療育の特徴として、①障害がある子どもにこそ教育が必要という考え方を基盤に、家庭での個別課題学習などを通して徹底的に教え込むこと、②障害がある子どもを導くためには、親が優れた療育者になることが不可欠であり、特に母親を優れた療育者に育てることを挙げた。

<キーワード> 自閉症スペクトラム、河島メソッド、トモニ療育センター、パラアスリート

【はじめに】

A（現在 26 歳）は、過去 2 回パラリンピックに出場し、2024 年にパリで開催されるパラリンピックへの出場を目指している。幼い頃は、自閉症の緘黙児と診断され、母親に暴力を振るう、気に入らないことがあると大声を出して暴れる、泣き叫ぶ、唾を吐くなど深刻な状態だった。娘をどのように育てたらよいか分からず悩んでいた母親は、Aが中学生になった頃から、トモニ療育センター（以下、トモニ）の河島淳子氏による指導を受け、家庭でも徹底して実践し続けた。

河島氏（現在 82 歳）は医師であり、自閉症スペクトラムの息子（現在 52 歳）を育てた母親でもある。河島氏は、障害を持って生まれてきた息子の誕生をきっかけに自ら療育方法を編み出し、1994 年愛媛県新居浜市にトモニを開設した。これまで約 30 年間、全国からトモニを訪れた親子は約 800

人に上る。本研究は、Aの生い立ち（特に生後～中学校卒業まで）について詳述する。また、河島氏の介入前後でAと母親に見られた変化に注目し、河島メソッドの具体的な内容、療育方針を明らかにする。

【方法】

1. 資料・文献調査：(1) Aの母親が記した家庭生活記録表（2010 年 9 月 6 日～2011 年 3 月 31 日）と 2012 年度年間レポート（2012 年 3 月～2013 年 3 月）、(2) Aが絵画教室に通っていた時の資料、(3) 河島氏による著書。

2. インタビュー調査：(1) 母親とAが小学生の時に通っていた絵画教室の先生（2023 年 3 月 8 日、2 名一緒にAの自宅にて対面実施）、(2) 陸上の指導者 1 名（2023 年 2 月 26 日、ZOOMにて実施）。

3. 倫理的配慮：全ての関係者に研究の主旨を説明し、同意を得た上で本研究を開始した。全ての関係者から本論文発表について承諾を得た。Aについては、調査開始時に、筆者から本人に口頭で伝えたとともに、母親から最終的な承諾を得た。個人や団体に関する情報の取り扱いについては、本論文全て（謝辞や参考文献含む）において、各自の希望に合わせ、匿名と実名を含む方法で記載した。

【結果】

1. Aの生い立ち

（1）生後～幼稚園まで

1998年1月27日、Aは3人兄弟の末っ子、待望の長女として誕生した。生後4か月頃から激しい人見知りが始まり、母親以外は家族でも受け入れられない状態だった。いないないばーをしても無反応で、おもちゃにも全く興味を持たなかった。1歳半検診では、泣きじゃくり、それ以降、定期的に医師や臨床心理士などに様子を見てもらったが、特に指摘されることはなく「様子をみましょう」と言われた。しかし、2歳半を過ぎても言葉が全く出ず、人見知りがエスカレートしたため病院を受診した。医師からは、表出性言語障害と診断されたが、特なる治療はなく、再び様子を見ることになった。

3歳3か月で「めばえの家」に親子で通園したが、医師の助言により、6か月後には幼稚園に入園した。最初の1週間は大哭きしたが、それ以降は元気に通園できるようになった。親子サークルなどにも参加したが、Aは他の子どもと違って模倣遊びや表現遊びなどを皆の前ですることはなく、帰宅後に一人で思い出しては楽しんでいた。

年長になり、運動会では、組み体操、ダンス、

リレーなどをきちんとこなした。しかし、リレーの後に園長先生から一人ずつ首にメダルをかけてもらうことは嫌がり、絶対に首にかけなかった。年上のお姉さんや兄たちと遊ぶことはできたが、同年齢の子どもたちの中には全く入っていけなかった。しかし、同年齢で一人だけ心を許せる友人ができ、その友達の家には母親がいなくても遊びに行けるようになった。

病院では緘黙傾向、自閉傾向と言われたが診断名はつかず、言語訓練や心理などの療育を行ったが、母親がいないと訓練室に入ることができず、全て母親同伴で訓練を受けた。母親がいれば何でもでき、母親がいなければ何もできないような状態ではあったが、元気一杯で表情はとても豊かだった。

（2）小学校

1年生の時、元気に通学し気の合う友人たちと遊びやプールに出かけていた。授業では、順番が回ってきたら答えることができたが、自分の意見を述べることはできなかった。2学期に入っていじめられるようになり、この頃から、Aの状態は緘黙傾向から緘黙へ変わった。

2年生になり、学校では一切喋らなくなったが、校門から一步出ると、集団下校する友人と会話していた。次第に腹痛を訴えて登校を渋るようになり、先生が指示すると机の下に隠れてしまい、先生は困っていた。主治医に相談したところ、小児保健センターの医師を紹介された。その医師からは、自閉症の緘黙児であり、非常に深刻な状態なので入院が必要であると言われた。また、この時期に緘黙を治さなければ完治は難しく、思春期に入ってから治ることはまず不可能と説明された。

3年生進級と同時に、小児保健センターに4か月間入院し（土日は外泊で帰宅）、入院中は隣接す

る虚弱児養護学校に登校した。Aは言葉に出せなくても黒板やノートを使って先生と筆談ができ、笑うと声が漏れることはあったが、決して話すことはなかった。緘黙の治療を目的として入院したが、ずっと話さないままだったので、発音などは返って悪化した。退院後は、一時も母親のそばを離れなくなってしまい、トイレに行くときも後追いをし、赤ちゃんのように泣き続け、気に入らないことがあると物を投げ、唾を吐き続けた。外出時は、道路の感触が気になるのか、座り込んで両手で確認してから歩き出すという強迫行動が目立つようになった。2学期からは、以前通っていた小学校に戻ったが、学校ではトイレに行かないという独特のこだわりが現れた。

4年生に進級した直後の授業参観で母親が見たAは、肩に力を入れ、亀のように首をうずめ、目をキョロキョロさせながら硬直していた。テストの時以外は何も書かず、授業中は何もせず、ただ座っているだけだった。母親は特別支援学級への転級を希望したが、本人が拒絶した。自宅でも強迫行動が目立ち、宿題にとりかかっても紙が破れるほど何度も書き直す、母親を横に座らせ、間違いを指摘するタイミングを指示し、気に入らないことがあると唾を吐き続け、大声を出した。4年生の終わりに、ひどいじめを受けていることが発覚し、母は支援学級に入れたかったが、本人が再び拒絶した。

5年生の授業中、順番に指名される際には、緘黙のAも必ず指名されており、喋らないから抜かすのではなく、クラスの一員として扱ってもらっていた。Aが家では沢山話すという話を聞いたクラスメートたちが、声を聞きたいと言って頻繁に遊びに来てくれた。母親によると、Aはとても嬉しそうで、友達や先生の接し方でこんなにも変わ

るものかと感謝した。Aは、食べ物が国産か外国産かにこだわっていた。ある時、校庭で焼きそばを食べていると、大きな声で「これ外国産？」と尋ねた。これが学校で3年振りに話した言葉だったが、それから再び学校で話さなくなった。一人で帰宅できない状態が続き、学校から自宅が見える距離であったにも関わらず、母親が迎えに来るまで4時間待ち続けるなど、独特の行動が見られた。

6年生になり、表情は強張り、先生からは「こんなに大変な子を受け持つのは初めて」と言われた。6月頃には、家庭でも緘黙になり、必要な単語を大声で叫ぶだけになった。また、祖父、祖母、次兄のことを全く無視するようになった。学校で大便を漏らし、そのままの状態帰宅することが増え、修学旅行の直前は毎日漏らすようになった。母親に対する暴力もエスカレートし、背後から髪の毛を力いっぱい引っ張り、後ろに倒すことが度々あった。主治医からAに処方されたリスパダールの量は増え続け、薬が増えると昼間でも寝てしまう娘のことを心配して医師に相談したところ、「静かに寝ていてくれれば、いいんじゃないの」と言われ、母親は愕然とした。卒業式は、座っているだけで礼をする時も一人だけ硬直しており、卒業証書をもらいに行くことができなかった。

(3) 中学校（トモニの指導を受ける前）

中学生になったら一人で帰宅する約束だったが、家の近くまで来ると大声を出して服を脱ぎ、大騒ぎした。家では「学校行かない」と騒ぎ、泣きわめいた。登校時は、学校についたものの、中に入ることができず、出たり入ったりを30分ほど繰り返した。交流学級と呼ばれる学級に通うことはできたが、座ってじっと観察しているだけで、何もしなかった。母親は娘の言いなりのような状

態で、3歳からお世話になっていた療育センターの心理士からは「もう、自分の力ではどうにもできない」と涙ながらに言われた。母親は保健師さんに相談したところ、大人の病院に入院する方法があると言われ、再び愕然とし、生きる希望を失いそうだった。

Aが通っていた絵画教室の先生も、Aが叫び、暴力をふるう姿を見ており、親子のことを心配していた。先生は、「単なる絵の先生ではいられなくなった」と述べ、Aの身体が硬直していたのでストレッチのイラストを描いて共に行う、発声練習をする、一緒に料理をして、完成した料理を絵にするなどさまざまな工夫をして関わった。その後、絵画教室の先生が、知り合いであった自閉症の子どもを持つ親の会の関係者に相談したことがきっかけとなり、親子はトモニに通うことになった。

(4) 中学校（トモニの指導開始後）

① トモニでの外来セッション1回目：2010年8月7日

父親、母親、長兄、Aの4人で、愛媛県新居浜市にあるトモニを訪れ、初の外来セッションを受けることになった。「こちらに座って下さい」と言われたが、Aは母親のそばを離れることができず大騒ぎした。そういう時は必ず「お母さん、そばにいてください」と言われたものだったが、トモニでは「お母さんがそばにいないと座れませんか？それならお母さんには、違う部屋に行ってもらいます」と言われた。母はとても嬉しくなり、この先生なら助けてもらえると直感的に感じたと言う。その後、母は別室に移動し、モニターでAの様子を観察したが、河島氏らが暴れる娘に汗だくで指導してくれたこと、母親以外の人たちと過ごす娘の姿を見て、涙があふれた。

河島氏が「今日は指示を入れます」と述べたが、

母は「この子は指示が一切入らない子です」と答えた。すると、「指示が入らないと決めつけて、そう接してきたのはあなたです。指示を入れます」と述べた。母は「確かにできないと決めつけていた」と思った。Aはよだれを出しながら、河島氏らに「死ね死ね」と叫び続けた。それでも、パズルや数字マッチング並べなどに取り組むよう指示を続けたところ、Aは叫びながらも、少しずつ課題をこなしていった。また、母から離れて自分の席につくこともできた。その後、Aは最後の挨拶ができなかったが、きちんとできない時は折り鶴を5羽折るように指示され、泣きながら鶴を折ることになった。河島氏は、「自閉症は導き方によって希望のある障害です。皆さん幸せになっておられますよ」と述べ、母親はこの言葉に大きな勇気もらった。

② 外来セッション1回目以降の取り組み：8～10月

初セッションの翌日、Aは起床時に叫んだ。母親は、娘は叫ぶことによって周りを支配することを覚えてしまったことに気づき、今後は絶対にわがまを許さず、妥協せずに関わっていこうと決心した。Aは、叫びが通用しなくなったため、その代わりとして母への暴力をエスカレートさせ、顔面をげんこつで殴ってきた。母はあまりの痛さに涙が出たが、セッション後1日目にして挫折する訳にはいかないと心を強くした。今からでも遅くはなく、この子が生きる力を養い、社会に出て行くことができるように育てようと決意した。

河島氏は親子に、早朝マラソンをするように指示した。早朝マラソンにより、食欲、精神、体力、睡眠が整い、トモニに通う人々やその家族の鬱病が薬に頼ることなく改善されていたからであった。早朝に起きようとせず、大声を出し、蹴って

くる娘を、母親は無理やり引っ張って起こした。コースの前半でAは、自転車でついて行く母に対し、自転車をわざと倒す、大声を出すなどしたが、後半は少しずつ走ることができた。初日の早朝マラソンは終えるまでに2時間を要した。

9月から、河島氏は母親と毎日メールで連絡を取り、本格的な指導が始まった。小学3年生で4か月間入院した際の詳細を尋ねた河島氏に対し、当時の医師からは、押しつけや過干渉にならないように注意し、出来そうな課題を出して褒める、言葉になっていない意思表示は積極的にくみ取るとよいと指導されたと返信した。

また、歯医者などに行くためテレビ番組を途中で切り上げるとAが大暴れすることがあった。河島氏は出かける時間を紙に書いて知らせる、それにより番組の視聴時間や自分のスケジュールが変更すること、家族もそれぞれのスケジュールがあるということを学ばせることが大切だと教えた。母親が実践を続けたところ、スケジュールの変更に対応できるようになった。また、Aが朝から暴言を吐き、椅子をひっくり返し、唾を吐いたことがあった。母はその悪態を見逃さず、「今日の朝、暴れたので昼食は抜きです」と言い、風呂掃除を課した。わがままは許されないことを教え、自分の行動に責任を持つことを学ばせるためであった。

河島氏は10月にトモニでのセッション（2回目）を予定したが、母親は不安だった。前回は家族で参加したが、この度は娘と二人だけで、長時間電車に乗って移動し、ホテルに宿泊しなければならない。不可能ではないかと思っていた時、河島氏から以下のようなメールが届いた。

「二人で、電車でトモニに来ることができる。これが目標です。外では気を遣う娘さんなので、き

っと上手くいきます。ホテルも泊まります。そのためには、どんな要素が必要か考えて下さい。母親が一人でやり抜く勇気がなければ、この療育指導はできません。彼女は暴君です。行き当たりばったりでなく、家で行う自習科目として、毎日同じで良いので、書き写しや計算などを準備する。言葉の遅れがあるので、読む力と書く力をつけていく。紙に書いて「大声禁止」「嫌なことは言わない」「暴言を吐かない」と貼ること。嫌がっても貼る。家庭は父母の権威が通る場です。子どもの機嫌を取り、言いなりになってはいけない。」

母は娘と二人でトモニに行く覚悟を決めた。Aは、親身になってくれた絵画教室の先生に対し、「絵のババー死ね」と言ったことがあった。この件について、河島氏は、絵画の先生に大変失礼なことをしたので、本人に詫言状を書かせるよう指示した。詫言状には『わたしは金ようびのかいがきょうしつするとき せんせいにむかって「えのババーしね」といってしまいました。もうにどいいません。もうしわけありませんでした』と書いた。泣きながら、よだれを垂らしながら8枚書き直し、2時間かけて完成した。

その後、「死ね」と叫ぶことはなくなったが、大声を出すことは何度もあった。その都度、何時間もかけて教科書の書き写しをするなどの課題を与えた結果、叫びは減り、声が出そうになると必死で口を抑えるようになった。河島氏は、Aのように言葉を発しない場合は特に、書く力をつけることが不可欠であり、そのために書き写しが有効だと考えている。一人で書き写しをすることは、自己を内省する時間となる。また、文字を書くことで、字が上手くなり、書くことが好きになり、分かる言葉や文章が増える。また、読み書きに自信がつくと、自己肯定感が高まり、学習に導く上

で役立つ。書き写しを通して、豊かな心を育むことが目的である。

③外来セッション2回目：2010年10月16日

母子二人で、無事トモニに到着した。セッション開始後、Aはなかなか席につくことができず「お母さんは出て行ってもらいますか？」と尋ねられると、何とか着席した。上目使いでよだれを垂らしながら検査を受けた。午前の部が終了する時に、挨拶ができなかったので鶴を折ることになり、指示に従わなければ余計な手間がかかり、損をすることを学ばせた。

その後、「みにくいあひるの子」の交互読みを行った。Aは、小学4年生から、家でも声を出して読むことができなかったの、トモニの先生が読んだ後、読む代わりに書くという方法で進めた。そのため、なかなか先に進まず、帰りの電車の時間が迫ってきた。河島氏が「お母さんだけタクシーに乗って、先にお帰り下さい。」と言うと、慌てたAは、泣きながら人前で声を出し、母と一緒に帰りたい一心で必死に音読したのである。母親はその姿に驚き、「この子はできない」と決めつけていたのは自分だったことに気づかされたと言う。それから親子は毎日、「みにくいあひるの子」の交互読みに取り組んだ。Aは「絶対読まん」と言っていたが、指示に従わないことは許されないと悟り、早口で音読できるようになった。交互読みは、毎日1～1時間半ほど行った。

④外来セッション2回目以降の取り組み：11月

Aは、学校から帰宅する際、自宅近くのある場所から一人で帰宅することができなかった。母が「今日は家まで一人で帰ってきます。家のチャイムを鳴らします。できます、いいですね」と伝え、本人は抵抗することもなく、黙っていた。学校からの帰り道、戸惑いながらも止まることな

く家に向かう娘の姿が見え、ピンポンとチャイムが鳴った。「お帰り、よしできた」と言うと、Aは慌てて家の中に入った。一人で帰宅できたのは、4年振りであった。Aは、部活の朝練に行きたがり、早朝に起き、身支度を整えて、一人で教室に向かうこともできるようになった。さらに、長時間の留守番もできるようになり、留守番中はパソコン、刺繍、家事などをして過ごしたため、母親は自由に行動することが可能となった。

⑤外来セッション3回目：12月18日

初のセッションから3か月以上が経過し、ここからは手取り足取りの指導から、母親が自分で考えて行う療育に突入した。セッションのテーマは「手をかすのではなく切り開いていく」であり、豊かに、自由に生きていくために何をするべきか考えた。子どもに従うのではなく、母親が凜とした態度で適切な方向に導く力を養えば必ず良い方向に向かうこと、無口で毅然としたリーダーになるべきことを学んだ。午前中は、数学の文字数と方程式に取り組んだ。Aはセッションでつまずくと泣き出したが、単にやり方を教えるのではなく、理解させることの大切さについても指導を受けた。

⑥外来セッション3回目以降の取り組み：12月～2021年2月

Aは小学3年生の頃から、国産のものしか食べることができなくなっていた。この課題を乗り越えるために、河島氏は「本格中華レストランに行く」という課題を出した。本人はとても嫌がったが、大騒ぎすることなく着席することができた。硬直し、なかなか食べ始めなかったが、半分食べることができたことによって自信がつき、食事の選択肢が広がることとなった。また、駅伝部に入部し、毎朝のマラソンの成果もあり長距離走のタ

イムが確実に上がった。走っているAの姿をみて友人たちは驚き、周囲から褒められることで本人の自己肯定感が上がったようだった。

Aは、人から物を受け取ることができず、机に置かれたものを受け取ることもできなかった。誰かが届けに来てくれて、いずれ手に入ると思っていたようである。祖母がお年玉を渡そうとしてくれたが、自分で受け取ろうとしなかったのも、母は「受け取らなかつたらなしです」と言った。Aは怒ったが、「自分でもらえなかつたら、なしです」ともう一度伝え、お年玉のないお正月になった。また、13歳の誕生日に、祖母が手紙入りのプレゼントを渡そうとした。今回もしばらく手を出すことができなかった。しかし、母が「いらないみたいだね」と言うと、慌てて受け取り、初めて人からプレゼントを受け取ることができた。

Aは、長兄が居間にいると部屋に入ることができず、少しでも長兄が通りかかると大慌てで血相を変えて飛び出した。長兄が居間にいると暴れ、ガラスを割り、椅子を投げたこともあった。母はAに気を遣い、長兄に入室を遠慮させていたのだが、それではAの指示に従っていることになり、家族が落ち着いて生活できない。母は、泣き出す娘に、「少しずつやってみる。今日は60秒」と伝え、長兄と同じ空間で過ごす練習をさせた。河島氏は、家系図から家族関係を意識させ、Aが家の主ではないことを理解させ、親の指示に従うよう訓練した。

Aは、人目が気になって学校のトイレに入れなかったのも、母親は練習のため、学校で人目につきにくい場所にあるトイレで挑戦させた。本人はトイレの鍵を閉めると開かなくなるのではないかと心配していたが、母は、全てのトイレの個室で鍵を閉め、開くことを確認して安心させた。そ

の翌日、本人から「トイレ行った、鍵かけた」と報告され、次第にトイレで用を足すことができるようになり先生方は驚き喜んだ。小学3年生から続いていたトイレの課題も乗り越えることができた。

⑦外来セッション4回目：2月18日

初めの挨拶時、きちんと立てず、肩に力が入り、いかり肩になった。口を閉じる、背中を伸ばす、手はひざに置く、肩を回して止めるなどのアドバイスを受けた。午前の計算問題では、見えないところを見えるように手伝うこと、現実と結び付け実感させる、方法のみを教えるのではなく理解力をつけることの大切さについて教わった。午後の数学では垂直二等分線、角の二等分線の引き方や証明、コンパスを使って描く、円周を計る、円や扇形の面積、交互読みを行った。その他、しないでいいようにするのではなく乗り越えさせること、出来ないという思い込みをしないこと、子どもの将来を親が勝手に決めつけるべきではないことなどについて指導を受けた。

⑧外来セッション4回目以降の取り組み

Aは卒業式のリハーサルに参加したが、やはり礼ができなかった。学校から知らされた母親は、Aに卒業式の意味と大切さを教え、式で頭を下げなければとても失礼であり参加する資格がないこと、卒業式では必ず頭を下げて礼をするよう伝えた。当日、先生から、Aは深く頭を下げており、式で目立つことはなかったと喜ばれた。卒業式終了後は、母親が不在だったが、自分で帰宅、食事、支度をして部活に行くことができ、Aの祖父母はその変化に驚いた。

(5)2012年度（中学卒業後）と現在の様子

2012年3月7日、Aは中学を卒業した。堂々と壇上に上がり、校長先生から卒業証書を受け取る

ことができた。2012年6月2日のセッションでは、料理の取り組みが不十分だったため、急遽料理のセッションに変更し、豚汁を作るのに2時間を要した。

河島氏によると、料理は自立に役立つ学習であり、さまざまな道具や食材を扱うことで「使える手」を養うことができ、社会参加が可能になる。料理が上手になると、人の役に立ち、喜ばれ、自信に繋がる。母親はこのセッション以降、真剣に料理に向き合い、Aは中学3年生から、毎日欠かさずに夕食を作り、食事の準備から片づけまでを行った。その後も母親は、娘とともに駅伝、料理、挨拶、計算、漢字などの課題に取り組み続けた。以下は、河島氏が母親に送ったメールである。

「やっと、母親であるあなたが変わって下さって嬉しく思います。(中略) 今までもそうでしたが、対決して取り組んできたことで、道が開けてきています。それをトモニでは、初めて出会った時からやってきました。絶対譲りませんでした。嫌がっても生きるために必要なことはさせ切ってください。母が変われば、子は必ず変わる。応援しています。」

2012年度の年間レポートの最後のページは、母親による以下の言葉で結ばれている。

『トモニの先生方からの「なんとしてでも、出来るようにさせる」という後押しがなければ、乗り越えさせてやることはできなかったと思います。この1年は、駅伝、料理、挨拶と頑張ってきました。これからは養護学校高等部に入学し、自立を目指して新たに取り組むことが多く出てくると思います。年相応に接し、圧力ではなく心を込めて療育に取り組んでいきたいと思います。』

その後、Aは高等部を卒業し、現在はある高校の非常勤職員として働きながら陸上選手として

の日々を送っている。2016年18歳で初出場したリオデジャネイロパラリンピックでは、女子1,500メートル（知的障害クラス）で7位入賞、2021年東京パラリンピックでも7位であった。2022年の陸上競技選手権大会では5,000メートルWPA（ワールドパラアスレティクス）アジア新記録、1万メートルVirtus（国際知的障害者スポーツ連盟）世界記録、その他の大会でも優勝を重ね、かつては人前で話せなかったAが、今ではインタビューに答えることができる。

陸上の指導者は、Aに対し「分かる」ための指導（理解）と「出来る」ための指導（技能）を分けて行い、特に「分かる」ための指導に時間を割いたと言う。一般的に「出来る」ための指導（例えば、長距離のタイムを上げるため、沢山走らせるなど）が重視され、「分かる」ための指導は見過ごされがちだが、実は「分からせること」がその後の成長に不可欠ということである。知的障害がある場合、競技のルールや、物事の順序性などを理解するまでには多くの時間を要するが、分かることによって出来るようになり、出来るようになると、さらに分かるようになるという相乗効果が生じる。指導者は、これまで多くの日本代表パラアスリートを育ててきたが、Aはトップ中のトップ選手であり、2024年パラリンピックでの活躍も大いに期待できると述べた。

【考察】

本稿では、河島メソッドの特徴を2つ挙げ、自閉症スペクトラムの人々に対する療育の在り方について示唆を得る。1つ目は、障害がある子どもにこそ教育が必要という考え方であり、Aの母親の言葉を借りると、「なんとしても出来るようにさせる」ことを目指している。出来ることを増

やすため、具体的な目標を定め、子どもの将来を見据え、徹底して教え込む。

Aが1～2歳半の頃、異変を感じていた母親に対し、当時の医療関係者は「様子を見ましょう」と述べるに留まった。また、緘黙の治療目的で4か月間入院したが、結果的に言葉を発するには至らず返って悪化した。さらなる入院や薬で対処したとしても、Aと家族が直面していた問題の根本的な解決には繋がらなかったことだろう。

また、Aが小学生の時の主治医は「出来そうな課題を出して褒める、言葉になっていない意思表示は積極的にくみ取るとよい」と指導したようだが、このような考え方は、河島氏の指導と真逆である。最初から出来ると分かっているような易しい課題を与えて褒め、言葉にせずとも誰かが先回りして、助けてくれるような過保護な状態が当たり前になると、本人が持っているはずの能力を使うことはなく、次第に後退する。成長の機会が失われるだけではなく、周囲の人々を意のままに操縦することを覚え、結果的に暴君や甘えん坊に育ってしまうことだろう。

河島氏の方針として、障害があるからやらなくてもいい、出来なくても仕方ないという考え方は皆無である。障害ゆえに理解や習得に時間がかかるのであれば、出来る限り早期から教育を始め、学習について行けるように準備する。出来ることを増やすために、子どもが出来ないこと、あるいは苦手な課題にこそ挑戦させ、打破させる。そのために使用する個別課題学習は、生きるために必要かつ基本的な事柄を習得させるためのものであり、①基礎学習（数の概念、国語など）、②家庭科技術（料理、買い物など）、③職業技術（折り紙、手芸など）のような学習に取り組む。

①～③を通して、単に知識や方法を学ぶだけで

はなく、指示に従う、やるべきことはやる、課題に最後まで取り組む、分からないことや苦手なことは回避するのではなく、練習を重ねて克服する、技術を磨き人のために働く、結果として自信や達成感、人から感謝される経験をし、自己肯定感が高まるなど、本人の心を豊かにしながら、生きる力を育むことを大切にしている。

河島氏は診断名にこだわっておらず、障害の種類が異なっても、根本的な教育方針は同じである。診断名よりも育児と教育を推進するため、子どもの様子を検査と課題学習を通して把握した後は、即刻、机上学習に移行する。河島・高橋（2018：9）は、以下のように述べている。

『特別支援教育を必要とする最重度の自閉症スペクトラム障害の子どもたちも皆学校に通えるようになり、温かい支援を受けられるようになったことを喜びながらも、その子ども一人ひとりの学習障害や行動障害に十分対応しきれていない学校の先生方の力不足と時間不足を残念に思っています。（中略）低い目標設定で子どもに向き合っている学校現場を見かけます。制度が整えられ、さまざまな支援が受けられるようになった今こそ、学校教育（特に算数指導）の質の向上を切に願う者です。自閉症児者は質の高い教育に応えてくれる可能性のある障害ですから』。

また、2023年9月、ある医学雑誌に掲載された対談の中で、河島氏は以下のように述べている。『障害があろうが、子どもたちには「学びたい」「伸びていきたい」という気持ちが必ずあります。（中略）どんなに重い障害を持つ子どもでも、関わる側が工夫し適切に教えれば、必ず学ぶことができます。もちろん大人も学び続けることができます。』

この子には障害があるから無理だろうという

考え方ではなく、分からなければ分かるように工夫し、指導や教材の改良を重ねて教え込むスタイルを貫いてきた。河島教材と呼ばれる手作りの教材は 22 種類（ひらがなマッチング、数字 100 並べなど）に及び、指導において不可欠である。

2 つ目の特徴として、育児は父母の共同作業であるべきとしながらも、特に母親を優れた療育者に育てることに重きを置いていることを挙げる。

「母が変われば子は必ず変わる。母が育てば、子は必ず育つ」と述べ、子どもに変わって欲しいければ、まずは親、とりわけ子どもと過ごす時間が長いことが多く、影響力が大きいと思われる母親の意識・行動の変革が必要だと言う。また、生きるための基本的な力を身につけ、社会生活の基礎について学ぶ場所は、学校以前に家庭であり、家庭を早期療育の場と捉えている。河島・高橋（2018：71）は、次のように述べている。

「親は無知のまま、放って置かれています。しかも学ぶ場もないのです。家庭での日々をどう関わって過ごしたらよいか教えてくれる場はないのです。問題行動をどう考えたらいいいのか、全く分からないでゴタゴタを増しているのです。自閉症スペクトラム児は、親の育て方が原因ではありません。しかし、脳に機能障害があると、その育児と教育は想像を絶する困難が伴い、歪みやすいのです。親を優れた療育者に育てることが大切です。」

障害のある子どもが学校や社会で生きていくために、まずは親が知識をつけ、育て方を学び、子どもを正しく導くことが重要となる。

【結論】

本研究は、自閉症スペクトラムの人々に対する療育とは如何なるものであるべきか検討するた

め、現在パラアスリートとして活躍する A の生い立ち（特に生後～中学校卒業まで）について詳述し、河島氏の介入前後で A と母親に見られた変化に注目した。その療育の特徴として、①障害がある子どもにこそ教育が必要という考え方を基盤に、家庭での個別課題学習などを通して徹底的に教え込むこと、②障害がある子どもを導くため、特に母親を優れた療育者に育てることについて述べた。本研究は、自閉症スペクトラムの人々に対する療育の在り方について、示唆に富む事例である。

【謝辞】

本研究にご協力頂きました山本忍様、山本萌恵子様、伊藤玲子様、下稲葉耕己様に心より御礼申し上げます。また、トモニ療育センターの河島淳子様と高橋知恵子様の長年に渡る歩みに心からの敬意を表します。

【文献】

河島淳子・片岡仁美（2023）療育は原石の中に“宝石”を見出す冒険－発達障害の子と母親を育てる治療教育．総合診療，33（9），1015-1025.

河島淳子・高橋知恵子（2018）発達障害の子どものための心を育て生きる力をつける個別課題学習．トモニ療育センター，1-381.

河島淳子・高橋知恵子・堀内宏美（2020）よりよい育児と教育を求めて．（2020 年トモニ発達支援所勉強会資料）．トモニ療育センター・トモニ発達支援所，1-149.